

第一
正 漢文教科書

秋山四郎編
卷之一

375.9
Ak9
資料室

41908

教科書文庫

4
820
41-1906
20000 18427

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

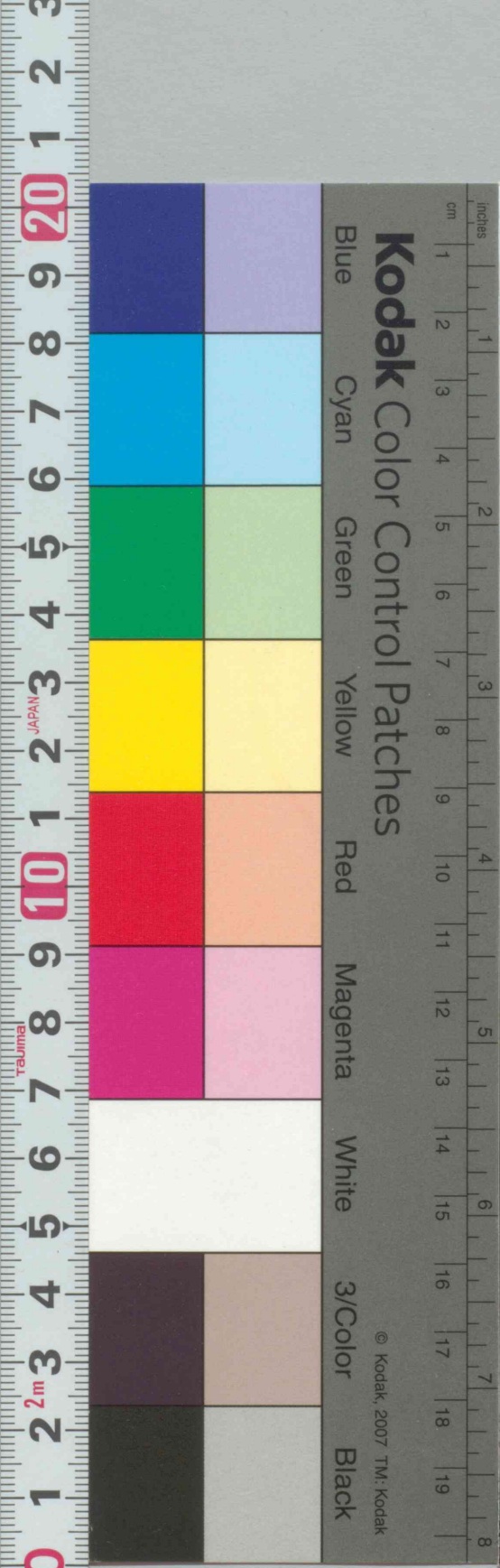


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



396.9
AK9

秋山四郎編

廣島大學圖書印



第一訂正漢文教科書卷之一

東京金港堂書籍株式會社

第一訂正漢文教科書卷之一目錄

- | | | | | |
|---|-------|-----|----|-------|
| 一 | 句法 | 十五課 | 一〇 | 猿救水月 |
| 二 | 荒木村重 | | 一一 | 大醫住無蘭 |
| 三 | 鸛 | | 一二 | 九年母 |
| 四 | 萬年龜 | | 一三 | 大木 |
| 五 | 萬物 | | 一四 | 牛董性度 |
| 六 | 母鳥 | | 一五 | 大砲 |
| 七 | 奇童 | | 一六 | 中江藤樹 |
| 八 | 虎 | | 一七 | 榕樹 |
| 九 | 村童牽狼牛 | | 一八 | 義犬 |

第一漢文教科書

卷之一

東京金港堂書籍株式會社

一九 狗鷲
 二〇 右府察微
 二一 正直
 二二 兄弟分
 二三 雙雁挾龜
 二四 加藤清正
 二五 伊率符
 二六 鰐魚
 二七 輝虎賦詩
 二八 龍騰
 二九 中山信吉

三〇 光
 三一 空屋怪物
 三二 遺金
 三三 服部中佐
 三四 太陽
 三五 東海鐵道其一
 三六 東海鐵道其二
 三七 東海鐵道其三
 三八 蠻民
 三九 上杉景勝
 四〇 富翁高樓

四一 巨彈爆發
 四二 鹽吹
 四三 本多重次
 四四 抹香鯨
 四五 弗蘭克林
 四六 仁和寺僧
 四七 沈默會
 四八 塚原卜傳
 四九 植物大小
 五〇 細絲之厄
 五一 白襷隊其一

五二 白襷隊其二
 五三 馬之演技其一
 五四 馬之演技其二
 五五 乳雀
 五六 修學旅行其一
 五七 修學旅行其二
 五八 駝鳥
 五九 鑄工
 六〇 瀧澤馬琴
 六一 空中巨人

目錄
終

漢學大學
圖書印

第一訂正 漢文教科書卷之一

一 句法

第一課

花が開く

(一) 花開

櫻子が盛に開きたり

(二) 櫻花盛開

富士山は日本第一の名山なり

(三) 富士山日本第一の名山也

横須賀、吳、佐世保、舞鶴は我が國の軍港なり。

(四) 横須賀、吳、佐世保、舞鶴、我國の軍港也。

第二課

太郎が書を読む

(一) 太郎讀書

次郎が文章を作る

(二) 次郎作文章

農夫は穀物を耕作す

(三) 農夫耕作穀物

工匠は器物を製造す

(四) 工匠製造器物

第三課

友人が東京に遊ぶ

(一) 友人遊東京

歩兵が練兵場に整列す

(二) 步兵整列於練兵場

日本國民は皆忠君愛國の精神に富む

(三) 日本國民皆富忠君愛國之精神

太閤秀吉は人奴より起れり

(四) 太閤秀吉起於人奴

第四課

氷が變じて水と爲る

(一) 氷變爲水

男子丁年に達すれば、則兵士と爲る。

(二) 男子達丁年則爲兵士

某を推して級長と爲す

(三) 推某爲級長

空氣を壓搾して流動體と爲す

(四) 壓搾空氣爲流動體

第五課

僕は身體強健なり

(一) 僕身體強健

我が國は氣候溫和にして、風光明媚なり。

(二) 我國氣候溫和而風光明媚也。

某生は品行端正にして、學業優等なり。

(三) 某生品行端正而學業優等也。

露國の海軍は、一は則旅順口に敗れ、一は則日本海に敗る。

(四) 露國海軍一則敗於旅順口一則敗於日本海。

第六課

父學資を其の子に給與す。

(一) 父給與學資於其子

父其の子に學資を給與す

(二) 父給與其子學資

校長卒業證書を生徒に授與す

(三) 校長授與卒業證書於生徒

校長生徒に卒業證書を授與す

(四) 校長授與生徒卒業證書

第七課

予は猫を好まず

(一) 予不好猫

課業を怠ることなかれ

(二) 勿怠課業

教室に在りては、靜肅にすべし。

(三) 在教室可靜肅

猥に邸内に入るべからず。

(四) 不可猥入邸内

第八課

僕は未だ嘗て湯薬を服せず

(一) 僕未嘗服湯薬

兄弟の子は猶子の如し

(二) 兄弟之子猶子也

我れは將に東京に遊學せんとす

(三) 我将遊學東京

人は宜しく信義を守るべし

(四) 人宜守信義

吾人は當に忠孝を重んずべし

(五) 吾人當重忠孝

君盍ぞ勉強せざる

(六) 君盍勉強

第九課

先生生徒をして漢文を講讀せしむ

(一) 先生使生徒講讀漢文

文法を説きて、其大意を知らしむ。

(二) 説文法令知其大意

賴朝範賴義經に命じて、平氏を伐たしむ。

(三) 賴朝命範賴義經伐平氏

天子侍從武官長を遣はして、出征將士を慰問せしめ給ふ。

(四) 天子遣侍從武官長慰問出征將士

第十課

入學を請ひて許さる

(一) 請入學被許

敵軍敗走し、或は殺され、或は擒にせらる。

(二) 敵軍敗走。或見殺。或見擒。

墮落書生は、世人に嫌惡せらる。

(三) 墮落書生。爲世人所嫌惡。

勤勉の書生は、先生に愛顧せらる。

(四) 勤勉書生。愛顧乎先生。

第十一課

文字は、知らざるべからず。

(一) 文字不可不知也

我が軍、未だ嘗て克たずんばあらず。

(二) 我軍未嘗不克

人の一生は、久しからずとせず。

(三) 人之一生。不爲不久。

疑は、敢て質さずんばあらず。

(四) 疑不敢不質

第十二課

予は甚だしくは釣を好まず

(一) 予不甚好釣

予甚不好釣

敵軍常には勝たず

(二) 敵軍不常勝

敵軍常不勝

僕は盡くは既修の學科を遺忘せず

(三) 僕不盡遺忘既修學科

僕盡不遺忘既修學科

彼れは必ずしも愚ならず

(四) 彼不必愚

彼必不愚

第十三課

明治三十八年四月始めて中學校に入る。

(一) 明治三十八年四月始入中學校

宮城門外に楠公騎馬の銅像あり。

(二) 宮城門外有楠公騎馬銅像

日本人は武勇を以て天下に鳴る。

(三) 日本人以武勇鳴於天下

先生教室に臨める時生徒一齊に起立して禮を行ふ。

(四) 先生臨教室時生徒一齊起立而行

禮。

第十四課

二三子、何ぞ學の成らざるを患へん。

(一) 二三子、何患乎學不成。

虎は猛しと雖も、焉ぞ能く象に敵せんや。

(二) 虎雖猛、焉能敵象哉。

長上の命は、我れ敢て従はざらんや。

(三) 長上之命、我敢不從乎。

日課終りて後遊ば、豈愉快ならずや。

(四) 日課終而後遊、豈不愉快乎。

第十五課

爰に地圖の彩色を施せる者あり

(一) 爰有地圖施彩色者

二兔を逐ふ者は一兔をも獲ず

(二) 逐二兔者、不獲一兔

某氏得たる所の金を學校に寄附す

(三) 某氏寄附所得金於學校

正成帝の嘗て賜ひし所の寶刀を以て、正行に授けて訣別す。

(四) 正成以帝所嘗賜寶刀授正行訣別。

右所示十五課漢文句法大要也。諸子宜理會之。然後講讀左諸篇。

二 荒木村重

村重素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の變に、首として信長に應じ、迎へて大津に謁す。面貌甚だ偉なり。會饅頭を獻ずる者あり、信長佩刀を抜き、饅頭を鋒に貫き、以て村重に啗はしむ。村重進み、口を開きて之を受く。信長

ナッルナッ

笑ひて曰く、好男子、攝津十三郡、汝が之を剪取するに任す。

村重素以雄豪聞。部兵皆驍。義昭之變。首應信長。迎謁于大津。面貌甚偉。會有獻饅頭者。信長拔佩刀。貫饅頭于鋒。以啗村重。村重進。開口受之。信長笑曰。好男子。攝津十三郡。任汝剪取之。賴山陽

三 鶴

獨逸の村落に高塔あり。鶴其上に巢くひ、三雛

を乳す。鶴朝に出て、暮に歸り、以て常と爲す。
一日塔火あり、鶴烟を望みて還り、空中を盤旋
すること霎時、忽ち下りて一雛を銜み、他處に
移す。再び來り又一雛を銜み去る。三たび來れ
ば則烟燄鬱勃たり。鶴衝きて入り、更に一雛を
索むれども得ず。遂に自ら焚死せりと云ふ。

獨逸村落有高塔。鶴巢其上。乳三雛。鶴
朝出暮歸。以爲常。一日塔火。鶴望烟而
還。盤旋空中。霎時。忽下銜一雛。移他處。



鶴

再來又銜一
雛去。三來則
煙燄鬱勃。鶴
衝而入。更索
一雛。不得。遂
自焚死云。

四 萬年龜

萬年龜といふものあり、某大に喜び、價を論ぜ
ずして之を買ふ。越えて三日、遂に斃る。某憤然

として往きて之を賣む。賣りし者從容として
曰く、是れ萬年の期已に盡きたるのみ。

有萬年龜者。某大喜。不論價買之。越三日
遂斃。某憤然往責之。賣者從容曰。是
萬年期已盡耳。信夫恕軒

五 萬物

世界の萬物は、分ちて二大宗と爲す。一を無機
物と爲し、一を有機物と爲す。無機物は、礦物
是れなり。有機物は、又分ちて二宗と爲す。一は則

知覺なくして運動すること能はざる者、植物
是れなり。一は則知覺ありて能く運動する者、
動物是れなり。

世界萬物。分爲二大宗。一爲無機物。一
爲有機物。無機物者。礦物是也。有機物
又分爲二宗。一則無知覺而不能運動
者。植物是也。一則有知覺而能運動者。
動物是也。蒙學動物教科書

六 母鳥

母烏衆兒を聚め、相謂ひて曰く、汝等畏るゝ所は何者ぞ。兒同聲に對へて曰く、巧射尤も畏るべし。母曰く、否なく、蓋名手の放つ所は、其の箭正し、故に之を避くること易し、拙射に至りては、則左右前後定方なし、箭の來る、度るべからず、此れ尤も畏るべきなり。

母烏聚衆兒。相謂曰。汝等所畏何者。兒同聲對曰。巧射尤可畏。母曰。否否。蓋名手所放。其箭正。故避之易。至於拙射。則

左右前後無定方。箭之來不可度。此尤可畏也。

七 奇童

一幼兒あり、機敏絶倫にして、人難ずること能はず。或る人之を聞きて曰く、吾れ其れ之を試みんと。因りて問ひて曰く、太平洋は幾滴の水より成るか。兒答へて曰く、是れ知り難からず、但し大陸の萬川、日夜奔注して舍まず、子且つ之を抑めよ、我れ便ち當に之を計るべきのみ。

有_レ一_レ幼兒。機敏絕倫。人不能難。或聞之。曰。吾其試之。因問曰。太平洋成於幾滴之水乎。兒答曰。是不難知。但大陸萬川。日夜奔注。不舍。子且抑之。我便當計之耳。

八 虎

蘇門答立の俗、甘んじて虎の害を受けて、之を敢て除くことなし。毎に謂ふ、祖宗の魂虎の體に附す、故に之を殺す者は、則子孫昌へずと。是

を以て虎患日々に増し、寧處することあるなし。嘗て聞く、彼處は獼猴甚だ多く、一たび虎の來るを見れば、即奔りて樹に上る。虎樹下に至り、目を睜り咆哮す。衆猴驚きて落つること果の如しと。

蘇門答立之俗。甘受虎害。而莫之敢除。每謂祖宗之魂。附于虎體。故殺之者。則子孫不昌。以是虎患日增。莫或寧處。嘗聞彼處獼猴甚多。一見虎來。即奔上樹。

訂正 漢文 卷之十一 金港堂書箱校式會館

虎至樹下。睜目咆哮。衆猴驚落。如果。博

物新編

九 村童牽狼牛

村童狼牛を牽きて、細徑を過ぎ、一貴人に遇ふ、蓋田主なり。童偶帽を脱することを忘る。貴人愠りて曰く、汝何ぞ無禮なる。曰く、牛狼ること甚だし、閣下幸に楯衡を持たれよ、奴便ち當に帽を脱して至敬を表すべきのみ。

村童牽狼牛。過細徑。遇一貴人。蓋田主

也。童偶忘脱帽。貴人愠曰。汝何無禮也。曰。牛狼甚。閣下幸持楯衡。奴便當脱帽。表至敬已。

一〇 猿救水月

印度に巨樹あり、尼俱律と名づく。一夜群猿樹下に聚る。傍に深井あり、月影適水に在り、老猿俯して視、驚きて曰く、月公井に没す、蓋ぞ下りて之を救はざる。皆之を難んず。老猿曰く、是れ難からざるなり、我れ其れ之を試みんと。因り

第一 漢文 文斗書 卷之十一 十五 金港堂書箱校式會館

て手にて一枝を援りて曰く、汝等交互其の尾
を持て、群猿之れに従ひ、累々として連珠の状
を成す。將に水面に達せんとするるとき、枝忽ち
折れ、猿悉く井に墮ちて死す。

印度有巨樹名尼俱律。一夜群猿聚於
樹下。傍有深井。月影適在水。老猿俯視。
驚曰。月公沒井。盍下救之。皆難之。老猿
曰。是不難也。我其試之。因手援一枝曰。
汝等交互持其尾。群猿從之。累累成連

珠狀。將達水面。枝忽折。猿悉墮井而死。

一 大醫住無蘭

大醫住無蘭疾病なり、衆醫來りて枕を護る。病
間住衆に謂ひて曰く、吾が死近きに在り、但し
吾れは我が病を憂へずして、他人の疾を憂ふ、
幸に三名醫を得たり、以て後人に遺すべし。衆
争ひて其の名を問ふ、蓋各其の選に中らんこ
とを期するなり。住曰く、他に非ず、其の第一を
淨潔博士と爲し、第二を節欲先生と爲し、第三

言正... 卷之... 全... 會...

を運動國手と爲すと。衆醫相視て茫然たり。

大醫住無蘭疾病。衆醫來護枕。病間住
謂衆曰。吾死在近。但吾不憂我病。而憂
他人疾。幸得三名醫。可以遺後人。衆爭
問其名。蓋各期中其選也。住曰。非他。其
第一爲淨潔博士。第二爲節欲先生。第
三爲運動國手。衆醫相視茫然。土屋鳳洲

一三九 九年母

香柑俗稱九年母。使僮餉人。僮謂橘也。
金橘也。我已食之。未嘗此味。算數九個。
所以有斯名。輒懷其二。往告曰。聊獻七
年母。他主婦解苞。莞爾笑曰。嘻。九年母
耶。僮忽探懷。謝曰。二年母在於此。信夫。恕

一三三 大木

米國白根。烟山脈一帶。深林蒼鬱。夙名
於大木。其木似杉。蓋稱世界第一。落落



排雲霄相傳經二千年其尤大者直徑四
 十尺高及四百尺嘗開孔道於
 林中而巨

幹盤根。連結層累。不可伐除。乃穿幹通
 路。車馬往來。不少礙云。

一四 牛董性度

牛董性度溫和。遇意外之事。不動聲色。
 一日牛董出書室。歸則見其所愛之狗。
 蹴倒火燭。案上堆紙。悉成灰燼。蓋積年
 所。刻苦測算者也。牛董既老。知不可復
 再。痛惜不措。然不加一毆打。特睨狗曰。

汝作害于人。而汝不自知乎。嗚呼。中村敬字

一五 大砲

大砲以長大稱。梅谷則名於肥大。皆角
觝之雄者。一日二人散步于橫濱市街。
衆爭出觀之。莫不驚嘆。一歐人偶來。亦
注視。乍進比肩。梅谷稍高。頗有得色。又
進比大砲。低甚。恰似兒童倚壯夫。歐人
竊苦笑。顧望大砲。匆匆趨去。

一六 中江藤樹

中江藤樹恒患痰咳。每疾累數枕而臥。
從愈去之。病革時。其母問之。藤樹懼母
之憂。力疾手自去一枕曰。小愈。母曰。然
則不日必起。悅而出。藤樹則死矣。川田
琴卿歎曰。先生之於孝。至死不變。可謂
至孝矣。角田簡

一七 榕樹

樹中奇者爲榕樹。其枝下垂至地。再生根成幹。印度多是樹。其最大者幹大者三百五十。小者三千。延長三町餘。樹陰可容七千人。其始惟一幹耳。其枝漸次下垂。多歷年所。一株遂成一林。土人以爲神聖。崇敬之。以樹陰充行宗教儀式之場。重野成齋

一八 義犬

有少年牽赤黑兩犬來。逐入之海中。兩犬爭先游泳。有間回頭望陸而還。赤常在先。黑則似稍疲者。赤屢顧後而待。如將扶之者。已近岸。赤一躍而上。黑則不能。於是赤再投海。欲援黑上。岸高。赤又率黑。遍索坦處。纔得上陸。赤黑相依掉尾而去。觀者皆歎其友誼。

一九 狗鷺

驚居海邊者。名狗鷺。不能自沒水獲魚。常立巖上望之。偶見鷺銜魚而揚。則徐追之。鷺輒避而高揚。隨追隨高。及其高極。急逼之。鷺竟放魚。鷺即承之於空中。云。蓋鷺之初徐追鷺者。欲其高揚也。欲高揚者。欲便於空中攫放魚也。

二〇 右府察微

信長嘗自剪十指甲。使侍臣收其剪餘。

侍臣搜索左右。久而不去。信長問汝何故不退。答曰。剪餘既得九。而未見其一。信長爲起拂兩袖。則爪片墜者一。信長大賞之。曰。人之用心當如此。緻密。大槻磐溪

二一 正直

甲乙村人爭畔不決。甲謂乙曰。聞本日官遣吏來視。幸就乞裁判。乙曰。可。但余今日刈稻忙甚。子獨往。并陳余言。後得

一報則足矣。甲於是自往訟理。擬兩造。既得決歸。至曰。曲在我。

三三 兄弟分

一紳士散步郊外。乞丐進曰。兄弟分。少垂憐。紳士顧笑曰。吾兄弟無乞丐者。乞丐曰。四海之內。皆兄弟也。紳士領曰。然。探懷投文久一枚。丐顰蹙曰。客矣。紳士曰。四海之內。皆兄弟也。汝盍遍就四海兄弟。

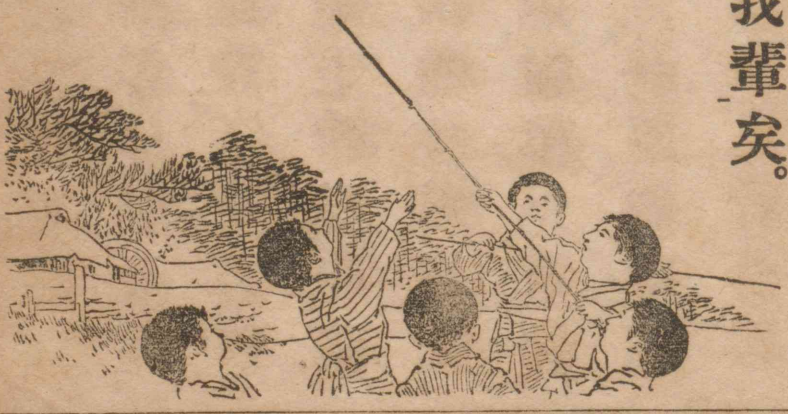
各乞一錢。汝富必倍於我輩矣。

三三 雙雁挾龜

池上有雙雁。與龜相狎。



會天大旱。池水漸涸。雙雁相謂曰。龜兄。困可知。盍相救。乃往弔曰。



早魃爲虐。池心將裂。兄之窮厄。果爲何
若。幸我儕有翼。四翼挾一甲。徙之水涯。
何足爲難。龜頓首謝其厚誼。已而雁銜
枚示龜曰。君亦銜此。但途上勿發一語。
開口則失身。於是雙雁挾龜。鼓翼飛揚。
天風吹送。冷然快甚。途過村落。兒童仰
觀。嘲龜無能。龜忿恚。不覺一喝。忽墜石
上。甲破而死。
土屋鳳洲

二四 加藤清正

清正航海歸肥後也。駕大艦呼天地丸
者而西。艙間日讀論語。以朱墨自句。清
正有所愛。胡孫遊戲不離側。偶起之廁。
胡孫矚其亡。竊把朱筆。縱橫塗抹卷上。
清正復坐視之。笑曰。汝亦有志聖人之
道乎。復研朱墨。句而不輟。
大槻磐溪

二五 伊率符

希臘人伊率符初備耕在田有一旅客
過指前村問曰赴彼處要幾時間伊答
曰第行矣客慍曰吾唯問其時間耳曰
第行矣客怒罵而去伊視其行步曰二
時間而可也客顧詰之伊曰不知汝行
步遲速安得計所須之時間

二六 鰐魚

南米熱地多鰐魚人畜動輒被害而其

捕猿尤巧云鰐往林下水濱潛身現頭
一猿偶見便報之群猿群猿來折林樹
投之鰐為不知以任其所為猿初怪不
敢近後漸近漸狎已而群猿手相繫累
累如連鎖終撫鰐頭鰐忽開大口吞之
群猿驚散

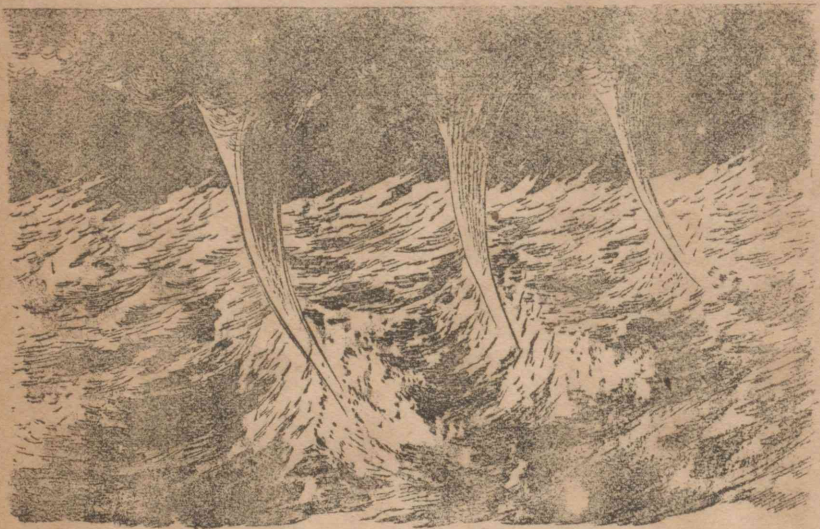
二七 輝虎賦詩

上杉輝虎勇略絕人善用兵每臨陣馳

行數次。隊伍乃定。雅好藝文。其征能州。適值九月十三夜。會諸將。燕飲。賦詩曰。霜滿軍營。秋氣清。數行過雁。月三更。越山并得能州景。遮莫家鄉憶遠征。其風流如此。青山延于

二八 龍騰

空氣流動。激蕩旋轉。爲渦。謂之龍騰。世俗所謂龍卷。其實則旋風也。或起於陸。



龍騰

或發於海。其於海。則捲萬斛潮。直接雲天。望之如建一大圓柱。時或有見數大圓柱。行動不止。已圓柱離海而昇。俗謂之龍上。

天至其起於陸者。則發家屋。拔樹木。人畜倒。土石飛。嘗起於上野國邑樂郡。捲長柄明神祠前。一大石華表而去。不知其所之云。

二九 中山信吉

德川賴房多子。而未置嗣。大猷公命中山備前守信吉。擇諸子。信吉至。水戶見諸公子。察其賢否。諸公子皆修飾出見。

公子光罔甫六歲。見信吉呼翁。直把盤上。打錫賜之。信吉大喜。抱光罔曰。真我嗣君也。乃還白之。遂立為世子。即義公也。世稱其識鑒。岡田儔

三〇 光

凡物能自發光者。如太陽與燈燭。曰發光體。不能自發光者。如木石鐵土等。曰闇體。闇體必受發光體之光。人目乃能

見之。燭光與人目間。持書隔之。則燭光爲所蔽。若易以玻璃片。則燭光仍可見也。故凡物體蔽光者。曰不透明體。不蔽光者。曰透明體。理科教科書

三一 空屋怪物

有空屋里人。謂見怪物。有一人自負曰。我當往試之。又有一人曰。我將入而宿焉。又有一人曰。我必擒鬼。時夜三鼓。先

入者。回視室內。不見一怪。少焉。戶外蹇然有響。曰。鬼至矣。閉戶堅拒。在外者以爲內有鬼。拒我。內外暗默相爭。一人後至。謂兩鬼方鬪。不敢進。已而天明。三人相見。交語其故。哄然別去。

三二 遺金

或遺金七百圓於途。乃託新聞社募拾者。曰。當謝以一百金。有人拾之來報。遺

失者俄詰曰我金本有八百今唯七百是子既私一百也拾者怒訴之官官吏一警知其偽判曰遺失者言金本有八百而拾者即曰七百是別有遺七白金者也若至他日無有其人則當照法規為拾者之有若其遺失八百金者則姑待後報。

三三三 服部中佐

明治三十三年六月太沽之役海軍中佐服部雄吉率陸戰隊與各國聯合軍共進各國軍為先鋒我軍為後拒已迫砲壘敵彈雨注先鋒趁趁中佐見之切齒麾隊兵突進忽中丸斃舉軍咸歎稱其忠勇絕倫翌年六月聯合軍總指揮官獨將和留垵流筮來我邦過伏見差副官奠花環於中佐墓以祭之嗚呼中

佐一死名耀四海矣。

三四 太陽

太陽較吾人所居之地球大一百三十萬倍。設地球之大如豌豆。則太陽當爲二尺對徑之球也。然其距又極遠。計三百三十三兆三億三千三百三十餘里之遙。卽一小時能行九十餘里之汽車。亦必三百八十九年方能自地抵日也。

其遠既如是。故望之與月等大。其實則以日比月。月祇如一粟而已。理科教科書

三五 東海鐵道 其一

鐵路之用。以通有無。應緩急。固廣矣。大矣。不待言也。而又有可以俯仰古今。挹攬形勝者。東海鐵路。自東京以至京都。十八時間。可以達百四十里。其間眺矚之。忽變感慨之所觸。不遑枚舉也。乘

第一發汽車發新橋抵橫濱。又西走過大船到國府津。大船有抵橫須賀支線。若遊箱根熱海等者。當於國府津下車。

三六 東海鐵道 其二

相駿之界有足柄嶺。山重谷複。其間鑿隧道架鐵橋者數所。自國府津路漸躋。登極則達御殿場。御殿場在東海鐵路中。爲最高處。自御殿場路低下。車行太

迅。過沼津浮島。渡富士川。川西卽爲治承中平軍與源軍對。聞水禽群起聲。相驚遁走處。午時可達靜岡。自沼津到此。右顧則芙蓉聳雲表。左眄則田子浦清見瀉。與三保松原相對。稱爲東海第一。景勝自靜岡西渡。大井天龍二大川。過濱松。則有濱名湖。架鐵橋。其長在鐵路中。亦爲第一。



三七東海鐵道其三
 經豐橋岡崎日暮
 抵名古屋有關西
 鐵道可以達伊勢
 神宮發名古屋過
 尾濃平野盡處為
 關原德川家康大
 破石田三成軍即



此處也德川氏霸
 業實基於此今則
 山丘回互郊原荒
 涼感慨係之矣自
 米原沿琵琶湖東
 經彥根草津踰勢
 多抵大津湖上遙
 望比叡比良諸山

風光明媚可愛。過逢坂隧道。則達京都。百里之遠。可坐而到。豈非雍熙之化使然乎。重野成齋

三八 蠻民

凡動物中有等級階級。莫甚於人類。蓋由於智識有明暗。習俗殊文野也。近徵之我邦。如北海道。愛乃樺太土人。臺灣生蕃。比之本土人。其懸隔果何如也。雖

然更有甚焉。如濠洲蠻民。殆有意想不及者。試舉其一斑。民無定居。常食草根昆蟲蛆及貝類。饗膳以蜥蜴及蛙為最上珍味。至其猛惡者。則嗜食己子。而知覺鈍劣。計數至五個以上。則茫然不能記之。噫亦甚矣。

三九 上杉景勝

黃門上杉景勝。豪邁而膽大。其臨陣前

隊既交戰。矢丸雨下。呼聲震天地。而景勝身尙臥幕中。鼙聲如雷。其朝于京師一行。鹵簿數十百人。寂不聞咳聲。唯覺人馬行聲。肅肅然耳。嘗渡富士川。人多船小。中流殆欲沈。景勝怒立舟頭。舉鞭一揮。衆皆躍入水。游而涉。船乃得達岸。平素未曾見喜悅之色。家有所養胡孫。偶蒙景勝所脫。巾帽走升庭樹。向景勝

點頭者三。景勝始莞然。左右侍御見景勝笑顏。唯此一事云。大槻磐溪

四〇 富翁高樓

有起三層樓者。一富翁見之。歆羨不措。曰。於戲美哉。輪焉奐焉。因謂我家資不讓于渠。何獨於三層樓讓之。急命工匠。相地擇材。經營卽工。已成第一層。翁視如怪之者。曰。汝費數日。將何爲。曰。造三

層樓耳。曰。余所欲在第三層。一層二層不構而可。曰。凡構造之法。先定基址。漸架至數層也。翁曰。不要贅言。唯須構第三層。匠憮然曰。賤工不能副大家望。請幸託之於起蜃氣樓者。土屋鳳洲

四一 巨彈爆發

南山之役。步兵第十八聯隊第二中隊。戰鬪最力。死傷最多。初中隊進至敵步

哨前千米突之地。將伏身敵。巨彈爆發。於散兵線中。砂塵騰空。毒煙捲地。上等兵都築音吉所持銃折爲三斷。右顧則鈴木上等兵背敵而伏。左方一兵亦伏。而向左側面。都築認爲伏身。曰。方向違矣。再呼不應。捉足引之。不動。進起之。觀下半面。爲敵彈所掠而死。走報之。小隊長某。某來。令屍向敵而收之。乍見左方。

一兵蠢蠢方起。泥沙滿身。俄曰。吾頭猶存乎。衆大笑曰。在矣。在矣。更奮勇進戰云。
土屋鳳洲

四二 鹽吹

幕府權官某一日有公事。着禮服詣小梅某邸。歸途過淺艸觀音前。左右肆店陳列鼓笛假臉諸玩弄物。某自輿中觀之。忽想兒孫俟吾歸。私命侍者買一臉。

所謂鹽吹也。顛頤折額。口在頰上。醜陋可笑。某謂無綬不可蒙。乃下輿。簾捻紙製綬。自當其面。結之髻後。以試寬窄。幕府之制。途逢賓僚。啓輿相揖禮也。會一權官來。先驅高唱其姓名。侍者啓輿急欲脫之。緊紮不可解。卽蒙臉而揖。賓僚大愕。後逢幕廷。談偶及之。滿座絕倒。
信

夫恕軒

四三 本多重次

本多作左衛門重次。爲人粗豪太簡。其進言於君。不避廣衆。照公愛重之。及擢爲奉行。與高力天野等並職國政。諸臣竊謂此一舉。明公亦失鑒矣。作左豈爲人上之器哉。旣而政令簡明。府無滯事。國內大治。輿人誦之曰。佛高力。鬼作左。彼此無偏。是天野作左。在家猶在官。凡

事貴簡。不屑煩碎。嘗在外贈書於妻曰。寄一筆。慎於火。阿仙不可瘠。馬可肥。阿仙其小女名也。大槻磐溪

四四 抹香鯨

米國有捕鯨船。多年漁於我東北海。而其所捕獲。多是號抹香者。占利頗鉅。案此鯨好游泳遠洋。少至近岸。其成群也。七八乃至二三十。或數百頭。其大者往

往至十四五尋。每年秋末。群牝各將其兒而游。群中若有遇銛擊者。則鯨群擁護。至其死。始離去云。抑捕鯨之利。綦洪而邦人未深用意於此。若能講其方精其術。則將來我邦之利。果何如乎。嗚乎。海國男兒。宜唾手而起。莫使米人獨擅其技。倆於東海上已。

四五 弗蘭克林

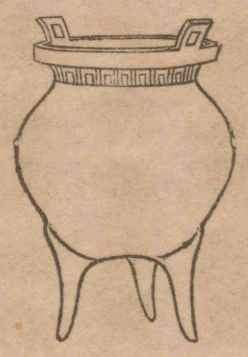
米人弗蘭克林之偉業。天下夙所稱歎。而其成立實由於高僧命左亞誠教云。初弗年十八。意氣軒昂。嘗訪命。命一見知其非常器。諄諄訓誨。而弗如不經意者。既而辭去。命送之。俱步廡下。將出門。頗低命曰。頭昂頭昂。弗貪談不省。忽觸楣。前額隆然腫起。痛甚。命乃懇諭曰。不聽我言。今果何如。凡欲大有爲者。必不

可不先下於人。不能下於人者。是所謂匹夫之剛。何足尚。弗大有所感悟。發憤遂就大業。晚年每語人曰。余之有今日。命左亞恩師之賜也。

四六 仁和寺僧

仁和寺僧。嘗設宴。一僧醉甚。取小鼎蒙首。壓鼻纔入。乃婆然起舞。一座鼓掌大笑。舞罷欲脫鼎。不得。面腫滿鼎。血涔涔。

下衆蒼黃欲毀鼎。痛楚不可勝。往謀之。



鼎

醫醫亦束手。乃還寺。衆環視無策。一人曰。極力脫之。縱失鼻耳。猶不至。

死。衆然之。遂齊力挽之。乃脫。鼻耳皆墮。僅得免死。青山延光

四七 沈默會

在昔波斯國。有一學會。名曰沈默。蓋期

應事接物。不多用言語也。其會員以百
 名爲限。大儒是武請爲會員。謝以員既
 滿。一日是武親訪會長某。對坐不語。有
 間。某崇水於玻璃盃。置之机上。是武便
 拾薔薇葉。墜在座者。泛之。某笑而領之。
 許爲會員。因出名簿。使錄其姓名。披而
 觀之。數字橫記曰。全員一百人。是武俯
 思少時。添於數字。第三位。左方以零符。

且書其下曰。不以有無爲損益。某熟視。
 嘆其語謙而才敏。乃削零符。移加之第
 一位。右方亦書其下曰。一人之智。十倍
 百人。

四八 塚原卜傳

塚原卜傳。常陸塚原人。父曰土佐守學。
 劍法於下總。人飯篠長意。擊刺妙天下。
 卜傳繼箕裘。仗劍周遊諸州。嘗東歸過。

近江上湖舟見六七客中有一士人狀
 貌猙獰鬚髯繞面自謂精武伎天下無
 敵卜傳抱膝坐睡如不聽者士睥睨曰
 吾子亦佩刀盍一言卜傳徐曰僕之伎
 與君異不求勝人欲不敗耳士作色曰
 子術何名曰無手勝流是也所佩何用
 曰是斷私心非斬人也士益怒曰子徒
 手敵我耶曰可士呼舟人上岸卜傳遙

指一洲曰岸上格鬪或傷人請於彼乃
 命舟近洲士躍起上陸拔劍麾曰客來
 客來卜傳脫刀付之舟人奪其棹一盪
 舟開去岸數丈大笑曰無手勝流是矣

依田學海

四九 植物大小

植物大小之差亦甚矣吾人尋常所見
 之樹其大者不過數十尺而其最大者

如米國白根畑山脈中所產滿孟須樹，有四百尺之高。如濠洲所產有利樹，其高及五百尺。而至其最小者，所謂微菌之類，則長不過千分之一。今欲視如此最小植物，則不可不照之精良顯微鏡，以千倍大其形。故以最小植物比之最大植物，蓋有一與億之差云。

五〇 細絲之厄

漁夫連綴釣鉤於長絲，置之湖中。朝投而夕舉之，獲小魚頗多云。一日魚母聚群兒，戒曰：春水漲綠，汝等思遠游，常在此候。而漁夫狡猾，巧誘致汝等，謹勿往他所。魚母去，衆兒相謂曰：母老過慮，此好時節，豈可徒過。相呼相追，跳躍而出。巡游半日，飽香味，肆嬉戲，極歡而歸。母尤其犯戒，衆兒咸謝。且曰：今日不遇漁

夫。唯有細絲。隨身後耳。勿多勞尊慮。母
 大息曰。汝祖汝父。皆罹此細絲之厄。意
 者。汝等不得復見我。語未終。水上有聲。
 漁夫舉鉤。魚兒累累。為所曳去。土屋鳳洲

五 白襪隊 其一

一等卒稻岡常三郎者。北海道人。甲辰
 十一月二十六日。際旅順第四總攻擊。
 選決死士。常三當選。一隊皆着白襪。冒

萬砲進。達於松樹山砲臺。格鬪數時。彈
 丸貫左胸。失神而倒。覺則我軍既退。四
 邊唯見死屍累累。相藉而自顧。則胸背
 血痕斑斑。被服污穢。呼吸頗難。每咳嗽。
 吐血痰。欲起無力。至翌朝。尚然。於是取
 防寒外套。蒙頭。伏砲臺下。既而敵兵兩
 三人來。銃床叩肩背。一再蓋驗其生死
 也。故不動。以裝死狀。乃劍尖撥外套。猶

瞑目不動。遂搜被服。奪財囊及烟包而去。

五二 白襪隊 其二

既入夜。寒威加烈。口訴渴。腹告飢。苦惱不可言。二十八日。咳嗽尙不止。咯血增紅。手足如冰。痛苦愈甚。入夜。奮氣匍匐。偶得我兵所遺水筒。纔得醫渴。又臥地上。至二十九日夜。髣髴聞人語。開目則

我衛生隊員。揭赤十字旗至。遂爲所收。送於繃帶所。蓋二十六日臨發。喫重燒麵餅六枚。爾後至三十日。不食一粒云。嗚呼。一等卒傷病之餘。在敵地。不食五日。而全生命。自非堅忍剛邁。膽力拔群。安能至於此哉。土屋鳳洲

五三 馬之演技 其一

獨逸某市。有觀技場。教馬演技。蓋有所

暗令默使也。馬師呼曰：看客諸君，惠來辱顧，感甚感甚。已而揚鞭一揮，馬進來。師曰：我愛兒，今日貴賓滿場，汝其可不昂乎？馬師進請看客借貨幣，一客貸之。師曰：愛兒，今所借之幣幾何？馬舉足打地若干，其數同貨幣之數。客一驚，師則喜其適中，獎揚一番。更問曰：今貨幣者，公子乎？掉頭然，則令孃乎？卽首肯曰：年

齒何如？又舉足打地，其數十七。曰：余意亦然。既而師一拜，揚聲曰：此特不過報開場。自今當奏主技，供清覽。此兒善解人語，因欲試心算。諸君幸親之。

五四 馬之演技 其二

於是客交言其數。師顧曰：愛兒，示總計。舉足打地，如其數。喝采聲起。師曰：加減算，辨之固容易。請試乘法除法。又更試

四則雜題及分數比例而馬一一舉足。示之答亦復無少差誤。衆客感嘆無語。場一隅。豫置拳銃以設機。師呼曰兒也。今日所演無一蹉跌。幸得看客諸公稱贊。臨終發銃以祝皇帝馬進近銃機師。高呼曰露細亞皇帝萬歲馬不動。又呼曰。奧地利皇帝萬歲馬依然不動。更大呼曰。獨逸皇帝萬歲馬便進。蹈機板轟。

然一發看客拍手絕叫嘆嗟。出場而去。

五五 乳雀

世子竹千代嘗見屋上乳雀命近臣往捕之。屋係大將軍燕室衆莫敢往。乃推信綱曰。汝年幼體輕宜往。信綱勉強應命也。夜潛緣屋索之。失足墮中庭。諫然有聲。大將軍提刀夫人執燭而出。見信綱詰之對曰。臣觀雀兒心欲之竊來捕。

也。大將軍曰。否。是必有主使者。窮詰再四。而不告。大將軍怒。內信綱於巨囊中。而鍼其口。懸之柱。曰。汝首實。即許去。信綱自囊中爭之。徹旦。旦日。大將軍出視朝。夫人憫之。私舐囊口。以餒啗之。復鍼口如初。日中大將軍入。復詰之。終不改辭。夫人固請而縱之。大將軍目送焉。謂夫人曰。孺子能如此。後必羽翼吾兒。鹽

谷岩陰

五六 修學旅行 其一

某月某日晴。予與同級生四十餘人。從諸先生發。饗時。午前六時。取道田間。行里餘。詣某神社。爲官幣大社。即祀日本武尊者。先生顧生等。使說尊事。歷皆謹對之。已而沿海岸。行數里。一帶松林。翠色欲滴。憩一茶店。喫午餐。餐了。復上道。

到某停車場。駕汽車。著某地。此地以古戰場著。遺跡頗多。先生指山對水。詳說之。使生等得當時攻守之概要。遂投宿於某地旅舍。浴罷。手錄此日所得。相與談笑數時。就寢。

五七 修學旅行 其二

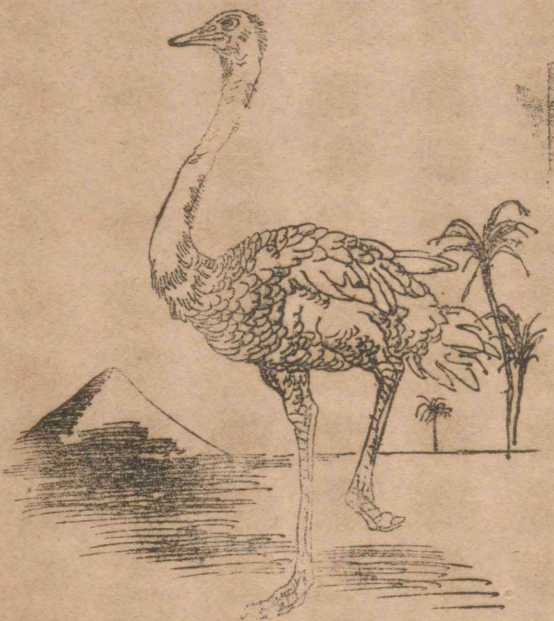
翌日晴。六點鐘出旅舍。街屋盡處。斜入細徑。行二里餘。達某山麓。山拔海二千

尺。不甚高。路險不易登。既至山頂。四望空闊。風景最佳。俯瞰昨來所經。歷歷可指。點踞石開所。携行厨。且談且喫。樂甚。相俱摸山川形勢。製一圖而去。遂出山背。有製紙場。入觀其製造法。場主詳解說。看畢。辭而出行。半里。復出海岸。日既下。春入停車場。遇汽車來。便駕而歸家。此行僅僅兩日。得吾師就現場。懇懇指

授。覺得益倍平昔。因記以備他日參考云。

五八 駝鳥

亞弗利加駝鳥。以似駱駝名。高七尺至十尺。其走之速。體之強。洵為絕倫。其背上載二人而走。駿馬猶不能超過之云。聲似獅子。土人亦間誤之。其尾翼長羽。嘗居貿易首要。近歲模造以他鳥羽。亞



弗利加駝鳥。為人所屬意。自往昔而然。

化。不敢翼覆。嘔煦。其較少熱之地。孵化。

舊約書中亦數見之。其卵甚異。重殆三磅。其產卵置之沙中。須太陽熱。自然孵

之方如常鳥。往昔具臘文士屢詠駝鳥。羅馬人以駝鳥供游觀。以其頭爲佳味。供饌。其居荒野者。性怯懦謹慎而活潑。故人難近接之。然如急追之。則止納頭於穴或草叢。自以爲安。遂爲人所獲。其飼養檻中者。生吞礫。小刀。硝子。破片等。而無害。亞米利加駝鳥。大不過其半。羽毛亦少。其能吞鐵片瓦礫等。則無異。重

野成齋

五九 鑷工

德國都邑。一旅舍。有兵士投宿。狀貌獐惡。鬚髯若戟。問主人曰。有鑷工善剃者否。主人曰。有。乃延至。兵士曰。命汝剃。不得留鬚一根。賞以四片金。若微傷。見血一點。吾刃加汝頭矣。因拔劍置床。橫臥榻上。曰。善爲之。鑷工大恐。託事走歸。命

其副工代之。兵士言如初。副工又走歸。命童代之。兵士瞋目曰。豎子能記余言。莫汗余刃。童唯唯執刀而進。始於上唇。終於下腮。用刀甚疾。鬚從刀而落。如風掃葉。頃刻而畢。兵士執鏡自照。撫頰摩頰。不見一小疵。乃償直如約。因問曰。好大膽豎子。不知吾劍之利乎。何以如此。童子笑曰。若致微傷。刀將貫公喉去矣。

寧待其動手乎。兵士愕然久之。愛其膽氣。賞以一片金。依田學海

六〇 瀧澤馬琴

瀧澤馬琴。名解字瑣吉。號曲亭。武州江戶人。喜稗史野乘。名聲大彰。嘗屏居一室。潛思著述。意匠慘澹。沈吟久之。時正正午下。偶家人令下婢供茶。而馬琴一意攻苦。不知背後有人。獨語曰。今夜必

縊下婢。掠奪其衣物。投屍于井中。以滅其跡。可謂妙計矣。因閣筆微笑。婢側耳于戶外聞之。驚悸謂主翁欲殺我。及昏而遁逃。赤跣歸家。泣告其父兄曰。兒今日隔壁聞主翁獨語。命逼今夕。不速去。殆為所魚肉。父兄色然舍匿其家。託疾乞暇。馬琴恠之。研詰一再。初首其所自。馬琴抵掌喻之曰。嚮者予著稗史。命意

沈吟。忽獲一奇趣。欣然不能自持。偶然上口。豈復有伎心邪。婢家父兄大笑。乃止矣。菊池三溪

六一 空中巨人

某甲與某乙。登山晚眺。甲曳杖。乙攜籃。雲樹蒼茫。夕陽繞巘。指顧間。忽見空中有巨人二。前者荷大物。後者提巨槌。揚手踏足。意似不良。甲乙駭極。踉蹌疾走。





巨人追逐數武而
 沒。遍告村人。莫知
 其怪。有智勇者。結
 隊登尋。數日無跡。
 一夕薄暮。巨人復
 現。數如其衆。各皆
 注目視之。頓悟乃
 己影也。蓋雲氣冷

凝于空。日光返照。如壁受影。甲乙方懼。
 未暇詳察焉耳。博物新編

訂正漢文教科書卷之一

第一訂正漢文教科書卷之一終

明明明明明明
 治治治治治治
 四四三三三三三
 十十九十五四四
 一十九五五四四
 年年年年年年
 一十九八三三十一
 月月月月月月
 二二三三三三
 十十三十五二
 六三六一八四
 日日日日日日
 五四發訂發訂發印
 正正正
 三再
 版版
 印印
 行行
 刷刷
 版版
 行行
 刷刷
 行行

訂正漢文教科書(卷之一)
 定價金貳拾五錢

明治三十三年十月廿二日
 文部省檢定濟



著者 秋山四郎
 發行者兼印刷者 金港堂書籍株式會社
 代表者 原亮三郎
 印刷所 帝國印刷株式會社

秋山四郎
 東京市赤坂區赤坂表三丁目五番地
 金港堂書籍株式會社
 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
 原亮三郎
 東京市下谷區龍泉寺町四百十番地
 帝國印刷株式會社
 東京市京橋區築地三丁目十五番地

發賣所
 大賣捌所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社
 各府縣特約販賣所

